

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	(中間報告) 集計	成果と課題及び改善策等	判定基準	備 考
1 生徒・保護者・地域の期待と信頼に応える学習指導と進路実現のため、GIGAスクール構想の推進と家庭学習習慣の確保をとおして、「確かな学力の育成」を図る。	① 生徒が主体的に授業に取り組めるように教員が授業改善を行う。	教務課 各学年 各教科	教師は、生徒が主体的・協働的に活動する場を十分に設定できていない。	【成果指標】 生徒は授業がわかりやすいと感じている。	授業がわかりやすいと答えた生徒の割合が、 A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満	A 90.4%	《成果》授業がわかりやすい項目に、「とても当てはまる」、「やや当てはまる」と答えた生徒が90.4%であった。 【課題】3.6%の生徒が「ほとんど当てはまらない」と答えており、対応が必要。 『改善策』日々の授業の中で分かりにくいと感じている生徒を把握し、個別に対応する。	C以下の場合 取組を検討する。	生徒へのアンケート
				【努力指標】 教師は、生徒が主体的・協働的に活動できる場を授業内に設定している。	授業ではchromebookを有効に活用したり、生徒がアクティブラーニングやグループ活動など主体的・協働的に活動できる場を、 ア.よく取り入れている。イ.少し取り入れている。 ウ.あまり取り入っていない。エ.取り入っていない。 A アとイの合計が80%以上 B アとイの合計が70%以上 C アとイの合計が60%以上 D アとイの合計が60%未満	A 100%	《成果》全教員が、Chromebookを有効に活用したり、生徒が主体的・協働的に活動できる場を取り入れていると答えた。 【課題】「よく取り入れている」と答えた教員の割合が23.8%と少ない。 『改善策』「少し取り入れている」と答えた教員に対し、教員間でICT機器の活用方法を共有するなどし、使用率を高めていく。	C以下の場合 取組を検討する。	教員へのアンケート
				【努力指標】 教師は、授業改善に活かす目的を持って互見授業に参加している。	授業改善に生かす目的を持って、互見授業に、 A 6回以上参加した。 B 5回以上参加した。 C 4回以上参加した。 D 4回未満参加した。	D 2.2回	《成果》1学期は21名の対象中、6回以上は3名、3回以上6回未満が2名、3回未満が16名の平均2.2回であった。 【課題】授業の持ち時間の関係で、互見授業の実施回数が少ない教員がいる。 『改善策』校内で実施される研究授業時に時間割変更等で互見授業を行える時間を設ける。	C以下の場合 取組を検討する。	教員へのアンケート
	② 家庭学習時間調査と個人面談を行うことで家庭学習習慣の定着を図り「確かな学力」を育成する。	教務課 各教科 各学年	家庭学習習慣が身につけていない生徒、家庭学習時間が不十分な生徒が多い。	【成果指標】 普通科の生徒は、1、2年生は学年+30分以上、3年生は学年×1時間の家庭学習を行っている。	【普通科1年】 目標90分の家庭学習時間達成状況が、 100%達成の生徒数を a 80%以上達成の生徒数をb 60%以上達成の生徒数をc 60%未満の生徒数を d とし、段階的に評価する。 (1.0×a + 0.9×b + 0.7×c + 0.5×d) / 32×100 (%) で計算した結果、学習時間を達成できている人数の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	B 71.6%	《成果》 クラスの平均学習時間は4月から毎月(4月 35.2、7月 72.0分)増加している。 【課題】 家庭学習時間が60分未満の生徒が多い。単元テストや定期考査の直前でないと学習時間が伸びてこない。 『改善策』 帰りのSHRで自分の手帳に「今日帰宅してから学習する内容」を記入する時間を取り、やるべきことを見える化する。	C以下の場合 取組を検討する。	月毎にクラスの学習記録を集計
					【普通科2年】 目標150分の家庭学習時間達成状況が、 100%達成の生徒数を a 80%以上達成の生徒数をb 60%以上達成の生徒数をc 60%未満の生徒数を d とし、段階的に評価する。 (1.0×a + 0.9×b + 0.7×c + 0.5×d) / 41×100 (%) で計算した結果、学習時間を達成できている人数の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	D 57.1%	《成果》概ね目標を達成する生徒(a,bに当てはまる生徒)が、昨年度より増加(R6 17%、R5 5%)した。 【課題】宿題やテストがないときに学習を行わない生徒が多い。 『改善策』2学期から始まるチューター制度を通して、進路実現のために家庭学習が必要であることを実感させる。		
					【普通科3年】 目標180分の家庭学習時間達成状況が、 100%達成の生徒数を a 80%以上達成の生徒数をb 60%以上達成の生徒数をc 60%未満の生徒数を d とし、段階的に評価する。 (1.0×a + 0.9×b + 0.7×c + 0.5×d) / 27×100 (%) で計算した結果、学習時間を達成できている人数の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C 60.3%	《成果》高校総体以降、進路実現に向けて学習時間を増加できた生徒が多く、中には月の平均学習時間が180分を超える生徒もいる。 【課題】継続的に学習時間を180分確保できない生徒が多い。 『改善策』進路意識を高く持てるよう個別面談とクラスへの声掛けを行い、進路実現に向けて取り組む雰囲気づくりをする。細かな学習計画により、やるべきことを明確にさせる。		
					【地域産業科1年】 生徒アンケートで、提出物や課題を提出期限内に「必ず提出した」と回答した生徒と「ほとんど提出した」と回答した生徒の割合の合計が、 A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満	D 52.6%	《成果》半数程度の生徒が提出物を期限内に出すことができている。 【課題】期日までに提出できない生徒が半数程度いる。 『改善策』課題や提出物の意義を伝え、困難な生徒には個別に支援することで、全員提出を目指す。	C以下の場合 取組を検討する。	
					【地域産業科2年】 生徒アンケートで、提出物や課題を提出期限内に「必ず提出した」と回答した生徒と「ほとんど提出した」と回答した生徒の割合の合計が、 A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満	C 78.5%	《成果》8割程度の生徒が提出物を期限内に出すことができている。 【課題】期日までに提出できない生徒が2割程度いる。 『改善策』手帳を活用させ、計画的に課題に取り組むよう促す。		
					【地域産業科3年】 生徒アンケートで、提出物や課題を提出期限内に「必ず提出した」と回答した生徒と「ほとんど提出した」と回答した生徒の割合の合計が、 A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満	A 90.0%	《成果》進路に関する書類の期限を意識して取り組んだ結果、提出率が90%となった。 【課題】まだ100%になっていない。 『改善策』引き続き進路を意識させることで、全員が提出物を出すように促していく。		

令和6年度学校経営計画に対する評価計画(重点目標に対する各課・学年の取組)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	(中間報告) 集計	成果と課題及び改善策等	判定基準	備 考	
	③ 各課・各教科と学年団が連携し、情報共有することで生徒個々に応じた多面的な進路指導を行い、生徒が進路実現に向けて意欲的に学習などに取り組める環境づくりを進める。	進路指導課 各学年	進路希望先を具体的に決定する時期が遅く、進路実現に向けた準備期間を十分確保できない傾向がある。	【成果指標】 生徒が年度末までに進路目標を定め、次の行動を意識することができている。	〔1年〕 年度末までに、進学希望の場合は上級学校を、就職希望の場合は職種を定め、次の行動を意識できた生徒の割合が、 A 80%以上 B 70%以上80%未満 C 60%以上70%未満 D 60%未満	D 37.1%	《成果》4割程度の生徒がおおまかな進路を定めている。 【課題】進路への興味関心が低く、進路希望の無い生徒がいる。 『改善策』担任との面談を中心に、より具体的な自分の進路を意識できるようにする。	C以下の場合 取組を検討する。	進路希望調査 生徒へのアンケート	
				【成果指標】 生徒が年度末までに具体的に進路目標を定め、実現に向けて準備を始めている。	〔2年〕 年度末までに、進学希望の場合は、具体的な上級学校を、就職希望の場合は具体的な職種を定め、実現に向けて準備を始めた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満		D 64.3%	《成果》6割程度の生徒がおおまかな進路を定めている。 【課題】校種が決まっても分野が決まっていない生徒や、職種が決まっていない生徒が多い。 『改善策』チューター制度を中心に、2学期に納得感のある進路希望を設定させる。	C以下の場合 取組を検討する。	進路希望調査 生徒へのアンケート
				【成果指標】 生徒が進路先決定に向けて十分な準備をしている。	〔3年〕 就職・進学において、進路先決定に向けて十分な準備をしていると回答した生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満			B 89.4%	《成果》ほとんどの生徒が進路先決定にむけて準備を行っている。 【課題】まだ100%になっていない。 『改善策』面談等を通して計画的に準備ができるように促していく。	C以下の場合 取組を検討する。
	④ 進路指導課と1年学年団・担任との連携により、進路面接の質を高め、面談回数を増やすことで進路目標の早期決定を促す。	進路指導課 第1学年	進路目標の設定が遅れ、総合的な探究の時間を自己実現に向けた取組として有効に活用できていない生徒がいる。	【努力指標】 生徒の進路意識を高めるために、生徒との個人面談を実施している。	生徒との個人面談の平均回数が、 A 6回以上 B 5回以上6回未満 C 4回以上5回未満 D 4回未満	D 1.5回	《成果》文理選択やコース選択に向けて、適切に面談を行うことができた。 【課題】生徒1名にかかる時間が長く、生徒全員の面談を終えるのに時間がかかっている。 『改善策』担任だけでなく、副担任や級外の先生とも協力して面談を行っていく。		C以下の場合 取組を検討する。	個人面談数調査 生徒へのアンケート
				【努力指標】 生徒の進路意識を高め具体的に進路を決定するために生徒との個人面談を実施している。	生徒との個人面談の平均回数が、 A 7回以上 B 6回以上7回未満 C 5回以上6回未満 D 5回未満		D 2回	《成果》希望進路の決定に向けて、適切に面談を行うことができた。 【課題】生徒1名にかかる時間が長く、生徒全員の面談を終えるのに時間がかかっている。 『改善策』2学期以降はチューター制度を活用し他の先生とも協力して面談を行っていく。	C以下の場合 取組を検討する。	個人面談数調査 生徒へのアンケート
	⑥ 一人一人の進路目標に対するきめ細やかな指導を目指すべく個人面談をきめ細かに実施する。	進路指導課 第3学年	学業と部活動を両立させている生徒が徐々に増えつつある。目標意識の高揚も併せて、実力養成のための補習、資格試験、模擬試験においても頑張っている生徒も増えている。	【努力指標】 生徒の進路実現に向けて個人面談を実施している。	生徒との個人面談の平均回数が、 A 7回以上 B 6回以上7回未満 C 5回以上6回未満 D 5回未満	A 7回以上		《成果》担任、進路と協力して面談に取り組むことができた。 【課題】1人1人必要に応じた面談を行っていく。 『改善策』引き続き担任と進路で協力して取り組んでいく。	C以下の場合 取組を検討する。	担任へのアンケート
【成果指標】 全校生徒が「遅刻ゼロ運動」の取組を意識して取り組み、遅刻0(ゼロ)の日が増えている。				遅刻0(ゼロ)の日が年間合計で、 A 140日以上(約72%) B 130日以上 C 120日以上 D 120日未満	1学期終了時 登校すべき日数 68日 遅刻ゼロの日62日 達成率91.1%		《成果》昨年度は遅刻ゼロの日は69日達成率(92.8%) 1学期は生徒会と生活委員が挨拶運動に積極的に参加している。 【課題】特定の生徒に遅刻傾向がみられる。 『改善策』生徒会・生活委員による挨拶運動及び登校指導で生徒を迎える。遅刻がみられる生徒には、個別に声掛けの継続や、担任と連携して指導と保護者協力を求める。	C以下の場合 取組を検討する。	毎日の出欠調査	
2 安全・安心な学校づくりの推進と地域みらい留学365による交流を通じて、変化する社会に対応できる精神的な逞しさを備えた「人間力の育成」を図る。	① 生活時間を自律的に管理できる5分前行動(登校)の一つとして「遅刻0(ゼロ)の日」運動に全校生徒で取り組む。	生徒指導課 生徒会 各学年	理由がなく遅刻する生徒の数は減ってきている。	【成果指標】 全校生徒が「遅刻ゼロ運動」の取組を意識して取り組み、遅刻0(ゼロ)の日が増えている。		遅刻0(ゼロ)の日が年間合計で、 A 140日以上(約72%) B 130日以上 C 120日以上 D 120日未満	1学期終了時 登校すべき日数 68日 遅刻ゼロの日62日 達成率91.1%	《成果》昨年度は遅刻ゼロの日は69日達成率(92.8%) 1学期は生徒会と生活委員が挨拶運動に積極的に参加している。 【課題】特定の生徒に遅刻傾向がみられる。 『改善策』生徒会・生活委員による挨拶運動及び登校指導で生徒を迎える。遅刻がみられる生徒には、個別に声掛けの継続や、担任と連携して指導と保護者協力を求める。	C以下の場合 取組を検討する。	毎日の出欠調査
				② 「いじめ調査」を月末に実施し、いじめの未然防止、早期発見、早期解決に努める。	生徒指導課 各学年	毎月のいじめ調査により、早期の発見、早期解決ができている。また昼食時の巡回や放課後の部活動での生徒観察により、生徒の変化に気づくことができている。		【努力指標】 いじめを見逃さない学校づくりに取り組んでいる	教員アンケートで、いじめ調査や巡回指導、面談や見守り・声かけなど、いじめを見逃さない学校づくり(いじめの未然防止、早期発見、早期解決)に取り組んでいると回答した教員の割合が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 80%以上90%未満 D 80%未満	A 100%

令和6年度学校経営計画に対する評価計画(重点目標に対する各課・学年の取組)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	(中間報告) 集計	成果と課題及び改善策等	判定基準	備 考
	③ 生徒会の「元気で活力ある健全明朗な学校づくり」の目標を実現するため、PTA等の協力も得て生徒がすすんで挨拶する運動を実施する。	生徒会 各学年 生徒指導課 PTA	昨年度のアンケート結果で、生徒が自らすすんで挨拶をしていると回答している割合はA評価である。	【成果指標】 自分から進んで挨拶をしている生徒が増えている。	「自分からすすんで挨拶している。」と回答した生徒の割合が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	A 98.0%	《成果》自ら進んで挨拶を意識している生徒は63.0%、まあまあ意識できている生徒は35%、あまり意識ができていないと回答した生徒は2.0%であった。 【課題】教師から見ると自ら進んで挨拶できていない生徒が年々増えているように感じる。 『改善策』学年や生徒会、進路指導と連携を図りながら、登校時「おはよう！声かけ運動」、SH時の挨拶指導や学年集会等を通じて指導する。意識するだけでなく、行動に移していくことを指導する。また、なかなか挨拶ができない生徒には教員から挨拶し、挨拶する習慣を身に付けさせる。	C以下の場合 は取組を検討する。	生徒へのアンケート
3	① 地域における6次産業の担い手として、「地域産業の振興に貢献できる人材の育成」を図る。	地域産業科	毎年、各種行事を実施し事後指導として感想文を書いているが、生徒の意識変化を分析していない。	【成果指標】 活動をおして生徒の地域社会に貢献する意識が高まっている。	地域社会に貢献しようという意識が高まった生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	D 66.7%	《成果》地元企業に來校して頂き、事業内容について説明を受けたことで興味を持った生徒は多かった。 【課題】生徒が就きたい業種がなく、地元以外を希望する生徒が多い。 『改善策』普段の各専門での授業や産業教育フェア、発表会等での活動を通して、地域社会に貢献しようとする意識を高めていく。	C以下の場合 は取組を検討する。	生徒へのアンケート
	② 保護者や地域の方に能登高校の理解を深めてもらい、行事に参加してもらうことで本校の人材育成に協力してもらう。	総務課	「能登高だより」の配布や能登町広報誌「広報のと」に連載することによって学校理解に効果が見られている。	【成果指標】 來校する保護者・地域住民が増えている。	來校された保護者・地域の方(学級懇談会・能登高祭・能登高商店開店時・教育ウィーク・PTA行事等)の人数の合計が、 A 1400人以上 B 1200人以上 C 1000人以上 D 1000人未満	D 624人	《成果》前年度の中間報告時と比較すると、來校者数は約100人増加した。PTA理事を中心に、あいさつ運動やPTA模擬店にも参加していた。 【課題】十分な数の地域住民の方に、直接本校生徒が活躍する姿を見てもらうことができなかった。コロナや震災の影響で能登高商店が開店できない分、地域の方の來校者数をどうやって増やすのが課題である。 『改善策』有線放送やマスコミ等への取材依頼はもちろん、早めに広報活動を行うようにする。	C以下の場合 は取組を検討する。	行事毎の人数調査
	③ 記名式アンケートにより個に対応できる態勢を整え、スクールカウンセラー等にも協力を仰ぎ、全教職員で、全ての生徒が「相談できる人がいる」と感じることができるようにする。	保健厚生 教育相談	昨年度末のアンケート結果によると大部分の生徒が相談できる相手がいると答えていた。しかし、「あまりいない」、「まったくない」と答えた生徒が少数いた。	【成果指標】 「親身になって対応してくれる人がいる。」と感じている生徒の割合が増えている	「親身になって対応してくれる人がいる。」と感じている生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	A 98.5%	《成果》ほとんどの生徒が「親身になって対応してくれる人がいる」と感じており、昨年度末のアンケート結果である95.1%を上回っている。 【課題】98.5%のうち6.9%が「相談にのってくれると思うが話にくい」と感じており、1.5%の生徒は「相談できる人がいない」と答えている。 『改善策』2学期の面談週を担任だけでなく全教職員で対応するとともに、普段から話しやすい関係づくりを心がける。また、希望する生徒にはスクールカウンセラーとの面談を勧めていく。	C以下の場合 は取組を検討する。	生徒へのアンケート
4	① 部活動加入後に、顧問が生徒の活動状況を把握し、参加できていない生徒に対して声掛けを行い、積極的に活動するように取り組めるようにする。	生徒会	多くの生徒が部に加入しているが、所属だけにとどまる生徒も見られる。	【成果指標】 積極的に部活動を行っている生徒の割合が増えている。	積極的に部活動を行っている生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C 77.4%	《成果》積極的に部活動を行っている生徒の割合は77.4%であった。 【課題】積極的に部活動に取り組めなかったと答えた生徒は22.6%であり、昨年度より増加傾向である。 『改善策』部活動に取り組めていない部員と面談し、自身で目標を設定させるなどし、部活動に参加させるきっかけをつくる。	C以下の場合 は取組を検討する。	生徒へのアンケート
	② 業務の割り振りを適切に行い、教職員の多忙化改善に取り組む。	教頭	年々、本校職員の時間外勤務時間は減少傾向にあるが、部活動指導や生徒の質問対応などにより個人差が大きい。	【成果指標】 職員が適正な退庁時間に帰宅している。	職員の勤務時間外勤務時間の平均が、 A 45時間以下 B 50時間以下 C 55時間以下 D 55時間より多い	B (45時間29分) 4月～7月平均	《成果》時間外勤務時間が80時間を超えない人の割合が増加した。 【課題】震災の影響により、部活動関連の業務が増えていることや、大会等が能登で開催できないことから遠方への移動や宿泊に伴う超過勤務で数名の時間外勤務が増加している。 『改善策』業務を分担するなどして軽減を図りたい。	C以下の場合 は取組を検討する。	時間外勤務時間調査